

『ゆけむり史学』第十一号の刊行によせて

白峰 旬

「ゆけむり史学」第十一号の刊行の運びとなり、喜ばしいことと思う。「ゆけむり史学」は年一回の刊行なので、十一年目に入ったということ、その歴史の重みはこれまで本学大学院歴史学専攻に在籍された方々の真摯な勉学と努力の軌跡であると言い換えることもできるだろう。また、前号の『ゆけむり史学』第十号を拝読すると、本学大学院歴史学専攻の修了生の方々の現在の御活躍ぶりを知ることができて、教員としてうれしい限りである。

私は今年度から大学院歴史学専攻の専攻長になった関係で、毎年七月上旬に行われている本学の学部生（史学・文化財学科一～四年生）対象の大学院進学説明会と、十一月の基礎演習（史学・文化財学科一年生）における大学院進学の説明で、本学の大学院歴史学専攻の内容を説明した。

その際に、過去十年間の歴史学専攻の修士論文のテーマと執筆者の一覧を印刷してプリントにしたものを配布し説明した。そのプリントを見ると、これまでの修士論文の各テーマは、日本史、アーカイブズ、西洋史、東洋史、アジア史、マヤ文明史などといった多岐にわたる分野において、時代幅もそれぞれ幅広く分かれていて、あらためて本学大学院歴史学専攻のこれまでの歩みを実感した次第である。

近年では、都市部の大規模な私立の総合大学で、それまで歴史系の学科がなかったところに、歴史系の学科を新設するケースもあり、このことは歴史系の学科へ一定数の進学者の需要があることを示しているであろうが、学科の上部組織として、本学大学院歴史学専攻のように、日本史、アーカイブズ、西洋史、東洋史、アジア史、マヤ文明史などといった多岐にわたる分野をカバーし、それぞれの専門分野の専任教員を配置している大学院の存在というのは国内の私立大学では稀有であろう。

毎年二月におこなわれる本学大学院歴史学専攻の最終試験（口頭試問）には、歴史学専攻の専任教員が全員出席して、修士論文を執筆した大学院生を前にして、いろいろな質疑応答がおこなわれる。この時にいつも思うのは、私の専門分野は日本近世史であるが、自分の専門分野以外の修士論文の内容を把握し、その質疑応答を聞くことにより、歴史を見る観点というのは多岐に渡るものである、と実感するのである。

こうした点も、本学大学院歴史学専攻のよい点であると思うので、今後もしこうした伝統を継続できるように、私も一教員として努力していかなければならないと思う次第である。